

## トレヴァー・ローパーに見るヒトラーの戦争目的

### Hitler's War Aims Argued by Trevor-Roper

堀内 直哉  
Naoya HORIUCHI

#### Abstract

On November 24, 1959, in the International Congress of Modern History in München, Hugh Redwald Trevor-Roper, professor at Oxford University, delivered a lecture on the subject of "Hitler's War Aims". At this lecture he made a point that Hitler, "Führer" and Chancellor of the Third Reich, was pursuing his war aims consistently since 1923. That is to say, "the conquest of additional living-space (Lebensraum)" in the east. In order to argue for the truth of his view, Trevor-Roper used four historical documents: "My Struggle (Mein Kampf)", "Talk with Hitler", "Hitler's Table-Talk" and "Hitler's Political Testamentary". In this paper I would like to examine the contents of the lecture again that was delivered by Trevor-Roper over fifty years ago.

*Keywords* : Trevor-Roper, Hitler's War Aims, My Struggle, living-space

キーワード：トレヴァー・ローパー、ヒトラーの戦争目的、わが闘争、生存圏

#### はじめに

20世紀に生じた第一次世界大戦（1914-18年）と第二次世界大戦（1939-45年）という二つの戦争に関し、1960年前後において、それぞれ一人の研究者によって提起されたドイツ側の戦争目的をめぐる、大きな議論が展開されることになった。前者については、1961年に出版された『世界強国への道——ドイツの挑戦、1914-1918年——』<sup>(1)</sup>のなかで、ハンブルク大学教授フリッツ・フィッシャーは、第一次世界大戦前の帝政ドイツの伝統的な支配層が推進しようとしていた世界政策の「主眼点」は、中央アフリカの支配と、ドイツの東方への勢力拡大を意味する中央ヨーロッパの支配であったことを明らかにした<sup>(2)</sup>。そのさい彼は、当時の伝統的な支配層の間で共有されていた、注目すべき次の事実を指摘した。「ドイツの支配層の戦争への意志の存在、開戦後一貫した領土併合主義の系譜、通常の列強の地位をこえる世界強国をめざす政策の追求」<sup>(3)</sup>が、それである。

従来、第一次世界大戦勃発の原因とその責任に関しては、大別すると、3つの説に分かれていたように思われる。第一は、ヴェルサイユ条約第7編のいわゆる「戦争責任条項」に基づいて、1920年代に主張されていたドイツ「単独責任」説である。第二は、この「単独責任」説に対するその後のドイツ国内外の反論や批判の高まりを受けたあと、特定国の戦争責任を否定する形で、当時の諸列強はオーストリア＝ハンガリー帝国とセルビアの戦争に多かれ少なかれ引きずり込まれてしまったのだとする、1930年代以降に主張されるようになった「巻き込まれ」説である。第三は、ドイツ側の戦争責任を若干は認めるにしても、せいぜい開戦へと向かうオーストリア＝ハンガリー帝国を引き留めることなく、開戦の決断にさいして同国に白紙の委任状を与えたそのドイツ側の無責任さを問う「白紙委任」説である。いずれにしても、1950年代まで第一次世界大戦の戦争責任問題は、おおむね第二の「巻き込まれ」説を中心に、第三の「白紙委任」説を含めて、論じられていたといえよう。

ところが、1961年にフィッシャーが著した『世界強国への道』の出版によって、第一次世界大戦勃発の原因とその責任をめぐる状況は、主に「巻き込まれ」説を唱えていたドイツの保守的な歴史学界と、中央アフリカおよび中部ヨーロッパの支配を目指していたドイツに「主たる責任」があると主張するフィッシャーやその支持者たちとの間の数年にわたる論争を経て、大きな変化を見せることになるのである。この著書のなかでフィッシャーは、「従来知られていた史料の新解釈と、いまやっと閲読できるようになった広汎な新しい史料の解明とによって、1914年の戦争勃発に際して、ドイツが決定的な推進者」となっていた事実を明らかにするとともに、従来の「ドイツの伝統的な見解よりも、ドイツがはるかに重要な開戦の推進者だった」<sup>(4)</sup>ことを強調したのであった<sup>(5)</sup>。今日では、第一次世界大戦勃発の戦争責任問題に関しては、フィッシャーが新たに唱えたこの第四の「主たる責任」説が、より多くの支持をえて、もはや多数説になっているということができるとはのではないだろうか。

次に、第二次世界大戦のドイツの戦争目的に関しては、1959年11月24日に、ミュンヘンで開催されていた「国際現代史学会」の席で、オックスフォード大学教授トレヴァー・ローパーは「ヒトラーの戦争目的」と題して注目すべき講演を行った。この講演を行うに至った動機の一つに触れて、彼は「編者のまえがき」のなかでこう述べている。今や「望まれるのは、単なる機会主義者としてのヒトラーという見解や、革命それ自体を目的とする『ニヒリズム』革命（ラウシュニング）といった見解、そしてとくには、その外交政策の部分に関して彼に全権が委ねられているヒトラー・プログラムの中身に対する過小評価を、繰り返し訂正することだけである」<sup>(6)</sup>。以下では、このときのトレヴァー・ローパーの講演内容について、詳しく見ていくことにする。

## 第一節 ヒトラーの戦争目的

「ヒトラーの戦争目的」と題する講演の冒頭でトレヴァー・ローパーは、「アドルフ・ヒトラーの戦争目的は、明白であり、彼の統治時代に由来する諸文書に詳しく書き留められている」

と明快に述べている。ヒトラーの戦争目的は、第一次世界大戦前の旧指導層の流れを汲む当時の保守勢力の目的と本質的には異なっており、同様にまた、ヒトラーを単なる権力に飢えた機会主義者にしかすぎないとみる第二次世界大戦後の歴史家たちの主張とも異なっているとし、この違いを明らかにすることが、彼の講演の目的であるという。そのさいトレヴァー・ローパーは、従来あまり真剣には取り上げられることのなかった四つの史料に改めて着目し、これらに基づいて、ヒトラーの戦争目的を明らかしようと試みたのである。第一の史料は、1923年11月8日の「ミュンヘン一揆」失敗後に反逆罪の罪に問われてランツベルク刑務所収監中に口述筆記で書かれた『わが闘争』<sup>(7)</sup>である。第二の史料は、権力掌握前後の1932年から34年におけるヒトラーの私的談話が書き留められた『永遠なるヒトラー』<sup>(8)</sup>である。第三の史料は、公式の議事録にも載っている主に1941年から42年にかけて語られた『ヒトラーのテーブルトーク1941-1944』<sup>(9)</sup>である。第四の史料は、戦争末期に自らの敗北を認めざるをえなくなった1945年に口にされた『ヒトラーの遺言—1945年2月4日-4月2日』<sup>(10)</sup>である<sup>(11)</sup>。

年代の異なるこれら四つの史料を通じてトレヴァー・ローパーは、順を追って、ヒトラーの政治経歴上の四大転機、すなわち①政治的敗北の時期（1923-24年）、②政治的勝利の時期（1932-34年）、③軍事的勝利の時期（1941-42年）、④軍事的敗北の時期（1945年）における彼の思考過程を窺い知ることができるとした。そして、これらの史料に基づく、1923年の「ミュンヘン一揆」から33年の権力掌握を経て45年の敗戦へと至るまで、22年間にわたって、ヒトラーの思想と行動には「絶対的な一致と一貫性」が見られるというのである。トレヴァー・ローパーによれば、ヒトラーの存命中にはドイツ国内外のほとんどの人々は彼の「首尾一貫した目的意識のある行動」を信じようとしなかったばかりか、戦後においても「ヒトラーの低俗で非人間的な性質」に嫌悪感を覚えていた歴史家たちによって、こうした事実はずっと疑問視されていたという。しかし、この講演においてトレヴァー・ローパーは、このような歴史家たちの見解をきっぱりと否定したうえ、ヒトラーの人物像に関して彼らは、その「道義的な低劣さから低い知能を推論するという誤りを犯している」と主張した。要するにトレヴァー・ローパーは、「ヒトラーの性格が低俗で残忍であった」ことは紛れもない事実であるとしつつも、四つの史料に基づいてヒトラーの思想と行動を改めて振り返ってみると、やはり「幼稚と冷酷」は、「創造力と首尾一貫した行動」と必ずしも相容れないわけではない、と述べたのである<sup>(12)</sup>。

こうしたヒトラーの「創造力と首尾一貫した行動」の存在を前提にしながら、トレヴァー・ローパーは最初に、第一の史料である『わが闘争』について論じている。同著に触れて彼は、『わが闘争』のなかで使われている嫌悪感を催させる粗野な言葉や、そのヒステリーさ、恥じることのないプロパガンダにもつばら目が行って、私たちは、この本に表れている、確かに洗練されてはいないが、疑いなく存在する〔ヒトラーの〕知能を無視してよいはずはないであろう」と前置きして、「この本には、細部に至るまで完全に仕上げられた一つの政治哲学が表れている」と述べた。すなわち、トレヴァー・ローパーによれば、ヒトラーは自らを「歴史専門家」

と自称しながら、「世界は歴史的な大転換期の始まりにさしかかっている」と断じたうえ、世界の行く末を彼なりにはっきりと明示していたのであった。ヒトラー独自の論拠に基づく、第一次世界大戦頃までヨーロッパ諸列強の対外政策に見られたごとく、巨大な艦隊力や海上権力、海外植民地からの富を通じて世界を支配する「小海軍国の時代」はもはや終わりを告げると同時に、これらの「小海軍国」によって打ち立てられた旧来の世界秩序も次第に解体していくことになることとされた。そして「将来においては、政治権力〔の獲得〕は、もはや遠くにある植民地——これは、意味のないものになっている——の保有ではなく、今日の技術的な対策によりようやく役立たせることが可能になった広大な国土の支配にかかっている」とし、「小海軍国の時代」のあとに来る「技術の時代」こそは、「領土の開拓に成功する国家に対して、それを基盤に世界帝国を継続して樹立できるチャンスを提供する」というのである<sup>(13)</sup>。

この「技術の時代」において、世界帝国を樹立できる能力と可能性を秘めているのはドイツとロシアであり、他ならぬドイツこそはこの歴史的課題に耐えられるとヒトラーは信じて疑わなかったようである。この歴史的課題を担うのは、彼によれば、もちろん第一次世界大戦で敗北して士気を喪失し、ヴェルサイユ条約で屈辱的な軍備縮小を余儀なくされたワイマール共和制下のドイツではなく、またかつてのような君主主義体制下のドイツでもなかった。彼が目指したのは、この歴史的課題を実現できる新たなドイツ国家の創建であり、そのために必要とされたのは、一部の王侯貴族間の権力闘争で生じた宮廷革命のようなものではなく、イデオロギー的にはまったく逆方向であるとはいえ、「ロシア革命に匹敵する歴史的な革命、すなわち、世界的な意義のある新たな権力要素をもたらすことになる革命」であった。そのさいヒトラーは、自らがこのような革命を起こし、その指導者になることを前提にして、次のように述べていたのだ。「自分は、歴史がごく希まれにしかもたらさないあの鬼才の一人である——自分には、歴史的な転換期を正しく判断し、実践的に有効活用することに精通しているあの哲学的・政治的化合要素が備わっているのだ」。続けてヒトラーは、「自分が権力の座に就いたなら、あらゆる傷口からまだ血を吹き出しているドイツのナショナリズムから、ドイツの歴史的使命にふさわしい革命運動を起こし、そして自分は、たとえばヴィルヘルム二世治下のドイツの幻影だった遠方の植民地ではなく、憎むべきソ連の広大な領土を征服しようとするだろう」と明言していたのである<sup>(14)</sup>。

こうしてトレヴァー・ローパーは、第一の史料である『わが闘争』のなかには、独善的ではあるにせよ「歴史専門家」を自称するヒトラーなりの一つの政治哲学に裏打ちされた戦争目的が、紛れもなく示されていることを戦後になって改めて強調したのであった。要するにトレヴァー・ローパーは、ヒトラーには機会主義的な側面が多少なりとも見られたのは事実であったにせよ、彼を単なる機会主義者にしかすぎないとして片付けてしまうのは誤りであり、実際には、ヒトラーには首尾一貫して追い求めてきた戦争目的が存在していたことを明らかにしたのである。この戦争目的とは、「ソ連の広大な領土を征服」すること、すなわち東方での「生存圏」の獲得であった。そこで、具体的に『わが闘争』のなかでヒトラーは、どのような論旨の

展開をもってして、ソ連を含む東方での「生存圏」の獲得という彼の戦争目的を導き出していたのだろうかについて、簡単に見ていくことにする。

## 第二節 『わが闘争』における四つの道

『わが闘争』のなかでヒトラーは、第一次世界大戦前における帝政ドイツの指導層の対外政策を批判的に検討することを通じて、実際には将来のドイツ外交の進むべき道を提示すると同時に、自らの対外構想をも口にしていたのであった。戦前を振り返りながらヒトラーは、「ドイツ帝国の未来は、ドイツ民族の生存の可能性を維持する問題にはかならなかつた」としたうえで、当時における毎年約90万の人口増加という「新しい国民の大軍を養う困難さ」に直面して、「この飢餓貧困化の危機を時機を失わずに予防すべき手段と方法が発見されないならば、いつかは破局に終るに違いない」ことは明らかであったと述べた。そこで、このような「恐るべき将来の展開を避けるために四つの道があった」という<sup>(15)</sup>。

第一の道は、「フランスの手本にしたがって、出生の増加を人工的に制限し、それでもって人口過剰に対処すること」である。しかし、この解決策についてヒトラーは、「ひとたび生殖自体が制限され、出生数が減少するやいなや、最も強いものや最も健康なものだけしか生きることを許されない自然的な生存競争の代りに、最も弱いものや、それどころか最も病弱なものも、どんな代価を支払ってでも『助け』ようとする当然の欲望」が生じてしまうと決めつけ、ドイツ民族ひいてはドイツ国家の弱体化をもたらすものであるとして批判した。ここには、イギリスの生物学者チャールズ・ダーウィン（1809-82年）の「進化論」をつまみ食いしたヒトラーが、独善的に「弱肉強食」や「適者生存」といった言葉を人間界にも適用し、彼独自の「社会ダーヴィニズム」論を展開していたことが窺われる。こうして彼は、このような形で人工的に出生増加を制限して、ドイツ民族の弱体化を招来することは、その民族から「いつかこの世界の生存権がとりあげられる」ようになり、「ドイツ民族から未来を奪う」ことになってしまうとして、第一の道を拒絶したのである<sup>(16)</sup>。

第二の道は、「われわれが今日しばしばくりかえし提案し称揚されていると聞いているもの、すなわち国土開発である」。しかし、この解決策についてもヒトラーは、土地の収益力の向上により「一定の期間人々は…飢餓の危険なく、ドイツ民族の増加の困難を防ぐことができる」ことを認める一方、「衣食に関する人間の要求は、年々大きく」なって「生活上の要求は一般に住民数よりも急速に増加する」ゆえに、「これはある程度までしか当たっていない」として批判した。また、ユーラシア大陸にまたがる巨大な領土を有するソ連を意識しながらヒトラーは、それほど広大でもないドイツ国家の土地の面積それ自体に起因する農業生産量の限界や国家安全保障上の相対的な脆弱性、ならびに土地の開拓・開墾に甘んじてドイツ民族が闘争心を忘れ平和裏に暮らしていけるといった幻想を抱くことに対する彼自身の懸念を指摘して、第二の道も拒絶したのである<sup>(17)</sup>。

第四の道は、「外国の需要に応じて商工業を起こし、その売上高によって生活をまかなってい

く」ために、経済拡張政策として「工業と世界貿易」を発展させ、「海軍と植民地」を拡大することである。しかし、この解決策についてもヒトラーは、「このような発展は、始めは比較的容易に、そしてまた恐らく迅速に達成されるものである」としつつも、工業や貿易の発展は、その時々国内外の経済状況や国際政治情勢に左右されやすく、「堅牢な強さというよりもシャボン玉」のように不安定であるとして批判した。そして、「ドイツがこの道を進んだばあいは、人々は少なくとも、ある日この発展も最後は戦争になるだろうことをはっきりと認識していなければならなかった」と述べたうえ、とくに将来のドイツの同盟政策に関して親英路線に固執していたヒトラーは、「われわれがこの道を歩むならば、そのばあいつかはイギリスがわれわれの敵になるに違いない」として、貿易摩擦や海軍力増強、植民地獲得といった点でイギリスと敵対関係に陥る恐れのある第四の道も拒絶したのである<sup>(18)</sup>。

最終的にヒトラーが唯一選択したのは、ソ連を含むドイツの東方での新しい土地の獲得を目指す第三の道であった。この解決策を通じて、「人々は過剰な幾百万人を毎年移住させるために、新しい土地を手に入れ、そして自給の原則ですっと国民を養っていく」ことが可能になるとともに、「過剰人口を移住させるために新しい土地の領土を求めることは、現在をでなく、特に将来を注視するならば、無限に多くの利益がある」とヒトラーは主張した。そして彼は、「領土拡大政策は……ヨーロッパにおいて実現される」べきであると述べたあと、巨大な領土を有するソ連を意識しながら、「ある民族がこの世界で他の民族より五十倍も多くの土地や領土を与えられているのは、たしかに神の意志ではありえない」として、ドイツ民族に対する地球上の土地分配の不公平感から、「われわれにも生活に必要な土地が与えられてもよいはずである」と決めつけたのであった。しかもヒトラーは、この「生活に必要な土地が与えられ」なかったときには、ドイツ民族の「自己保存の権利がその効力をあらわ」し、「示談が拒否されれば、まさしく拳骨でいかねばならない」として、武力行使すなわち戦争に訴えてでも新しい土地の獲得に乗り出すことを明言していたのである<sup>(19)</sup>。こうして『わが闘争』のなかでヒトラーは、第一次世界大戦へと至る帝政ドイツの対外政策を批判する形をとりながら、その解決策として四つの道を自ら提示してそれぞれに批判的検討を加えたうえ、最終的に第三の道、すなわちソ連を含む東方での「生存圏」の獲得のみを選択したのであった。注目すべきは、ここには紛れもなく、将来におけるヒトラーの戦争目的がはっきりと示されていたということである。

### 第三節 ヒトラーの首尾一貫した「生存圏」獲得構想

1932年から34年頃のヒトラーの対外構想を窺い知るために、トレヴァー・ローパーは、当時のダンツィヒ市参事会議長ラウシュニングがヒトラーに面会したさい、実際に耳にした会話の内容を自ら書き留めたメモを取り上げている。ちなみに、この第二の史料としての『ヒトラーとの対話』がヨーロッパ諸国で刊行されたのは、その5年あまりのちの39年12月のことであった。すでにそのときには、ラウシュニングはダンツィヒのナチ党との関係が悪化したことにより34年11月に職を辞して、翌35年にはアメリカに亡命しており、また39年8月23日には独

ソ不可侵条約が締結されて、同年9月1日にドイツ軍のポーランドへの軍事侵攻と同時にダンツィヒはドイツ領に編入されていた<sup>(20)</sup>。

この第二の史料である『ヒトラーとの対話』に依拠しながら、トレヴァー・ローパーは、最終的にはソ連を含む東方での「生存圏」の獲得を目指していたヒトラーが、一時的にせよ1939年8月23日に独ソ不可侵条約を締結するに至ったその理由の一端を明らかにしている。トレヴァー・ローパーによれば、首相になっていたヒトラーはすでに34年春に、対ソ外交についてはっきりとこう打ち明けていたという。「ひょっとしたら私は、ソ連との同盟を回避することはできないかもしれないだろう。私は、この同盟を最後の切り札として手のなかにしまっているのだ。ひょっとしたら、これは、私の人生における最大のギャンブルになるかもしれない。しかし、このギャンブルといえども、私が西側で自らの目的を達成したあと、決然として既定路線に方向転換し、ロシアを攻撃することを私にやめさせることなど決してできないであろう。…我々だけが大陸広域圏を創出することができるのであり、しかも、モスクワとの条約といったものを通じてではなく、我々の支配を通じてのみ、もっぱら我々の支配のみを通じてである。我々は、このための闘争を引き受けるつもりである。この闘争は、永遠の世界支配のための扉を我々に開くことになるだろう」<sup>(21)</sup>。

次に、第三の史料である『ヒトラーのテーブルトーク』において、トレヴァー・ローパーによれば、ヒトラーは自らが夢見た「千年王国」、すなわち将来樹立されるべき大ドイツ帝国について、こう思い描いていたという。この「千年王国」に君臨する支配民族は、獲得したものを再び手放したり、被支配民族の権利主張に何らかの配慮をするといった愚行を決して行つてはならないとされ、他方で大ドイツ帝国に従属する諸民族は、抵抗手段としての武器の所有を禁止されるとともに、支配者の命令を理解できる程度のドイツ語学習を除いては、どんな種類の教育も受けることを許されなかった。「また病院に行くことを禁じられていたので、その人口数は、出生率の低下ならびに高死亡率によって抑制されていた。このようにして人口が減少したならば、奴隷化したロシア人たちは、劣等な被抑圧者階級として存在し続けることを許され、そして、高速道路によって結ばれた難攻不落の要塞に居住してドイツ人であることを賛美しオペラ『メリーウィドー』の旋律に耳を傾ける、ドイツ人植民者の特権貴族たちのために、木を切ったり、水を汲んだりしなければならなかったのである」。こうしてヒトラーは、「千年王国」に暮らすドイツ人たちにとっては、「国家社会主義が一定期間存続したあとには、そもそもこれとは別の生活様式はもはや想像もできなくなってしまうだろう」と述べていたのであった<sup>(22)</sup>。

トレヴァー・ローパーは、ドイツ軍が1940年にフランスを占領してヨーロッパの相当領域を支配下に置いたあと、1941年の段階においてヒトラーは、このような「千年王国」建設への基礎をもはや築いたと考えていたのではないかと推測している。ところが、その数年後の1945年2月には総統官邸の地下防空壕に移っていたヒトラーは、首都ベルリンに迫り来る米英連合軍やソ連軍の軍事攻勢を前にドイツの敗北を間近に見据え、もはや「千年王国」建設への夢が潰え去ったことを認めざるをえない状況に陥っていた。そこで、この間の経緯を解き明かすため

にトレヴァー・ローパーは、第四の史料である『ヒトラーの遺言』を取り上げている。戦後においてしばしば口にされているように、当時のドイツの保守派エリート、すなわち帝政ドイツの流れを汲む「旧支配層」の多くが賛成しかねていた1941年6月22日の対ソ戦は、最大の誤りであったとか、あるいは、フランスの占領に成功した1940年の時点で立ち止まるべきであったとか、こういった類の言葉を地下防空壕にいたヒトラーは本当に口にしたのだろうかと問い掛けて、トレヴァー・ローパーは即座にこれをきっぱりと否定している。彼は、このときヒトラーが「白状して認めたのは恐らく、1940年ないしは41年にイギリスとの間で都合のよい講和を結ぶことが可能であった」という事実ではなかったかと推測している。けれども、その直後にヒトラーは、仮にこのときイギリスと休戦・講和条約を締結していたとしても、それは長続きするようなものではなく、来たるべき対ソ戦を見据えてドイツの背後の安全を確保するための一時的かつ戦術的なものであっただろう、と付け加えていた。これについてヒトラーは、「そのさいにはドイツは、背後の安全を保障されて、わが人生の聖なる使命、国家社会主義の存在目的、すなわちボルシェヴィズムの根絶のために、全身全霊を込めて真の戦いに突入することができたであろう」「東の方へ、もっぱら東の方へ我々の生命線は広がらねばならない」と述べていた<sup>(23)</sup>。

では一体、ヒトラーは自らの敗北の原因をどこに見出していたのだろうか、とトレヴァー・ローパーは問い掛けて、これについて若干の検討を加えている。まず、ヒトラーはそもそも戦争それ自体を開始すべきだったのだろうかという質問に対しては、トレヴァー・ローパーは、「最初からやはりナチス運動は、戦争というただ一つの目標を持っていた」ことを指摘したのであるが、事実、ヒトラーは1919年11月13日に、ドイツ労働者党（ナチ党の前身）入党後にミュンヘンの党大会で初めて行った演説のなかで、ドイツにとって過酷なヴェルサイユ条約を打破するためには、武力の行使をも辞さない姿勢を表していたのだった。次に、1939年9月1日に開始された戦争そのものをヒトラーはあまりにも早くやりすぎたのではないかという質問に対しては、トレヴァー・ローパーは、ヒトラーはそうは思っていなかったと断じている。むしろヒトラーにとっては、「それどころかもっと早く戦争を開始する方がよかったし、またどうしても避けられない西方に対する予備戦を1939年ではなく、早くも38年に始める方がよかった」のであろうとしていた。これを断念せざるをえなかったのは、ヒトラー自身が、38年においてはドイツは物質的に強かっただけで、道徳的には弱かったばかりか、国内には自分にまだ完全には心服していない反抗的な將軍や外交官、経済人たちが存在していると考えていたからだというのである。さらには、トレヴァー・ローパーによれば、1938年9月に武力を用いてチェコスロヴァキアを手に入れようとしていたヒトラーは、「ミュンヘン〔会談〕でヒトラーの全ての要求に応じ、彼から戦争遂行の理由を取り上げてしまった英首相チェンバレンの『いまいまい』振る舞いにも言及して」、こう述べていたという。「全ての点で、この臆病者たちは譲歩したのだ！彼らは、我々の全ての要求を受け入れた！そんな状況下では、いうまでもなくイニシアティブをとって戦争を始めることなど、ほぼ不可能であった」<sup>(24)</sup>。



トレヴァー・ローパーによれば、1945年2月にベルリンの総統官邸の地下防空壕のなかを行きつ戻りつしながらヒトラーは、ようやく自らの誤りに気がついたという。すなわち、このとき彼は、イタリアの首相ムッソリーニを信用していたことの誤りを口にしたのであった。もっともヒトラーは、当初よりムッソリーニには一目置いて彼を賞賛し、ファシズム運動を主導しローマ市内を進軍して権力を手にした彼の政治手法をお手本にしていたのはいうまでもなく、1938年3月にドイツがオーストリアの併合に踏み切ったさいには、イタリアがこれに反対して軍事介入しなかったことに対して、いたく感謝していたようである。しかし、トレヴァー・ローパーによれば、突然のイタリアのギリシャへの軍事侵攻により、ヒトラーにとって「1941年にムッソリーニは、悲劇の同盟者であることが明らかになった」という。すなわち、「その不運な地中海での冒険的な軍事作戦、とりわけ独伊両国間で事前の話し合いもなく都合の悪いときに敢行されたイタリアのギリシャへの軍事攻撃を通じて、ヒトラーはムッソリーニによって、独軍のバルカンへの軍事介入とそれに伴う対ソ戦の5週間の延期を余儀なくされてしまったのだ。1941年5月15日に予定されていた対ソ戦は、バルカンでの独軍の軍事行動の負担が原因で、6月22日ようやく開始することができた」というのである。このドイツ軍の対ソ攻撃の延期によってもたらされたヒトラーにとっての悲劇の結末について、トレヴァー・ローパーは、次のように述べている。「彼の対ソ攻撃は、電撃戦として計画されていた。5月に、それは実行に移されるはずであった。ところが、この対ソ攻撃は遅すぎた——5週間遅すぎた——ので、その後やってきたのは冬、すなわち予想に反してとても早く始まった恐ろしいロシアの冬であった。ドイツ軍は雪で立ち往生し、計画は台無しにされたが、他方でロシア人は回復することができ、イギリス人は新たな同盟者をつくり出して、その背後に新たな戦線を開くことができたのだ」<sup>(25)</sup>。

こうしてヒトラーは、ソ連を電撃的に奇襲攻撃して年内に同国を降伏させると豪語していた彼の目論見は外れ、かつてナポレオン軍がそうであったように、ドイツ軍部隊はロシアの冬將軍に見舞われ、首都モスクワに200キロ近くに迫ったところで、吹雪や極寒、泥濘のなか立ち往生してしまったのである。しかもドイツ軍は、西方でイギリスそして東方でソ連と戦うという二正面作戦を余儀なくされるとともに、同年12月8日の日本の真珠湾攻撃により、アメリカとも交戦状態に入って行くのであった。

## おわりに

ベルリンの総統官邸の地下防空壕において敗北間際にあってもヒトラーは、ソ連の領土を奪い東方でドイツ人が居住する「生存圏」を獲得するという自らの目的をまだ口にしていたといわれている。彼は側近のシュペーアに対して、ドイツは自分を見殺しにしたゆえ滅亡するにふさわしいと語り、ソ連を念頭に置きながら「将来は、もっぱらより強い東方民族に隷属する」ことになるだろうと口にしつつも、死の前日においても、地下防空壕から全国防軍に対して懇願するような最後の伝令、すなわち「ドイツ民族にとって、東方で空間を獲得することが使命

であり、またそうあり続ける」と訴えていたのである。ちなみに、この戦争目的を追求する前には、1923年にフランスが、40年にはイギリスが立ちはだかっていたとされるが、ヒトラーにとって英仏両国はいずれも真の敵ではなかったという。その後、1940年にフランスは一旦占領され無害にされてしまうと、ドイツ側から穏便に取り扱われて、たとえば「イギリス軍がノルマンディー海岸に上陸したとき、イギリス軍は、そこでの良好な物資の補給状況にひどく驚いた」と伝えられている。またヒトラーは、イギリスに対しては、常に同国の安全を「保障」する用意があったとされ、1924年にヒトラーは、もはや存在していないとはいえ、独英協調の必要性について一冊の本を書いていたとされている<sup>(26)</sup>。

1930年代においては『わが闘争』に記されたヒトラーの主張は、ドイツの国内外でほとんど真剣には受け止められていなかったといわれている。ヒトラー自身も、実行に移す前にこの書物に描かれた自らの真の戦争目的を周囲の人々にまともに受け止められるのをはばかったせいか、基本的にはあまり反響のない状況に甘んじていたようである。このような状況のままにしておくのは、周囲の目には、彼の一つの戦術であり、また「典型的な若気の至り」とさえ映っていたようである。戦術という意味では、ヒトラーは1939年8月23日に、真の敵対者であり、かつ征服すべき相手であるソ連との間で、独ソ不可侵条約の締結という「彼の人生のなかで最大のギャンブル」を一時的にやってのけたのであった。しかし、トレヴァー・ローパーによれば、これらの行動は全て、「戦術的な必要性」から行われたものであったという。やはり側近グループと食事やその他で一緒にいるときにはヒトラーは、いつも『わが闘争』に記された自らの主張を口にすることを決して止めはしなかったようである。そして、トレヴァー・ローパーによれば、ようやく「1941年にフランスやイギリス、またドイツの旧支配層がとどめを刺されたとき、ヒトラーは仮面を脱いだ」という。このとき「ヒトラーの偽りのない本当の声が再び聞けるようになり、そして彼は突然、敵と味方の区別なく容赦なしに、『自身の人生の夢、すなわち国家社会主義の存在目的』である東方領域の征服を実現するために、姿を現した」[対ソ戦の開始]のであった<sup>(27)</sup>。

## 【注】

- (1) フリッツ・フィッシャー（村瀬興雄監訳）『世界強国への道（Ⅰ）——ドイツの挑戦、1914-1918年——』（Griff nach der Weltmacht — Die Kriegszielpolitik des Kaiserlichen Deutschland 1914/1918. Düsseldorf 1961）岩波書店、1972年。同『世界強国への道（Ⅱ）』岩波書店、1983年。なお、副題の直訳は「1914-1918年における帝政ドイツの戦争目的政策」である。
- (2) フィッシャー『世界強国への道（Ⅰ）』27頁。
- (3) 成瀬治・山田欣吾、木村靖二編『ドイツ史3』山川出版社、1997年、86頁。
- (4) フィッシャー『世界強国への道（Ⅰ）』vii。
- (5) 木谷勤・望田幸男編著『ドイツ近代史』ミネルヴァ書房、1992年、250-256頁参照。
- (6) Hugh Redford Trevor-Roper, Hitler's Kriegsziele. In: Vierteljahreshefte für Zeitgeschichte, 2 Heft (1960), S.121.

- (7) アドルフ・ヒトラー（平野一郎・将積茂訳）『わが闘争（上・下）』角川書店、1973年。
- (8) ヘルマン・ラウシュニング（船戸満之訳）『永遠なるヒトラー』八幡書店、1986年。
- (9) アドルフ・ヒトラー（吉田八峯監訳）『ヒトラーのテーブルトーク1941-1944（上・下）』三交社、1994年。
- (10) マルティン・ボルマン（篠原正瑛訳）『ヒトラーの遺言—1945年2月4日-4月2日』原書房、2011年。
- (11) Trevor - Roper, Hitler's Kriegsziele, S.121-122.
- (12) Ebenda, 122-123.
- (13) Ebenda, 123.
- (14) Ebenda, 123-124.
- (15) ヒトラー、前掲『わが闘争（上）』194頁。
- (16) 同上、196-197頁。
- (17) 同上、197頁、200-202頁。
- (18) 同上、203頁、209-210頁。
- (19) 同上、203-204頁。
- (20) ラウシュニング、前掲『永遠なるヒトラー』383-384頁。
- (21) Trevor-Roper, Hitler's Kriegsziele, S.125. ラウシュニング、前掲『永遠なるヒトラー』157頁、164-165頁参照。
- (22) Trevor-Roper, Hitler's Kriegsziele, S.130-131.
- (23) Ebenda, S.131.
- (24) Ebenda, S.131-132.
- (25) Ebenda, S.132.
- (26) Ebenda, S.132-133.
- (27) Ebenda, S.133.

### 【史料】

1959年11月24日のミュンヘン「国際現代史学会」におけるトレヴァー・ローパーの講演内容（全文）  
 出典：Hugh Redford Trevor-Roper, Hitler's Kriegsziele. In: Vierteljahreshefte für Zeitgeschichte, 2  
 Heft (1960), S.121-133.

アドルフ・ヒトラーの戦争目的は、明白であり、彼の統治時代に由来する諸文書に詳しく書き留められている。ヒトラーの戦争目的は、1933年に彼を指導者にしたあの人々のそれとは異なっている。同様にヒトラーの戦争目的は、私の考えでは、彼はもっぱら権力に飢えている機会主義者にしかすぎないとみている歴史研究者たちによって、何度も彼のせいにされている目的とも異なっている。私の講演の目的は、これらの違いをはっきりと際立たせることにある——具体的には、四つのヒトラー自身の史料に基づいてである。さらなる証拠として、いくつかの比較的手軽な種類の文書に言及することも可能ではあろう。しかし、目下のところ私は、この四つの史料だけにとどめておきたい。

第一に、私は『わが闘争』という書物を取り上げるつもりである——ヒトラーの個人的な信条告白、すなわち、ご存じのように1923年に彼は、国家権力を奪取しようとする彼の最初の試みが完全に失敗したあとの拘留中に、この書物を書き記した。第二は、ヘルマン・ラウシュニングの『ヒトラーとの対話』〔邦題『永遠なるヒトラー』〕であるが、これは、1939年に初めて刊行され、彼の第二番目の成功した権力掌握の時代である1932年から34年にかけてのヒトラーの政治的な私的談話を再現していた。第三は、公式に議事録に掲載されている『テーブルトーク』〔邦題『ヒトラーのテーブルトーク1941-1944』〕であるが、これをヒトラーは、恐らく彼の最後の軍事的勝利の時代である1941年から42年に

かけて行っていた。このテキストは、完全版では英語で、要約版ではドイツ語で出版されている。第四の最後の史料としては、上記と似たような文書が用いられているのであるが、これは、昨年に初めて発見され、ドイツではまだ刊行されていない——彼が初めて自らの敗北を認めざるをえなかったあの時代（1945年2月）におけるヒトラーの『テーブルトーク』〔邦題『ヒトラーの遺言—1945年2月4日—4月2日』〕である。これら四つの文書は、幾人かの手によって開けられた四つの窓にたとえることができるが、これらの窓を通して、ヒトラーの政治経歴の四つの転機における彼の最も奥深い思考過程に光が当てられるのである。すなわち、①彼の政治的敗北の時期、②彼の政治的勝利の時期、③彼の軍事的勝利の時期、④彼の軍事的敗北の時期である。これら四つのなかの最初の窓を、ヒトラー自身の手は挑戦的に広く押し開けたのであったが、それは、彼は決して自分が敗北したのではないことを人々に示すためであった。第二の窓を彼は、むしろ好んで鍵をかけて大切に保存していたようである。というのも、1932年から34年頃において、彼の急進的なプログラム実現のための政治的・軍事的な諸前提を手にする前に、このプログラムを打ち明けるのは、彼には何ら重要なことでなかったからである。しかし、この窓を、ある敵対者の手が開けたのだった——正確にいうと、ヒトラーの見るところでは、それは「裏切り者」の手〔ヘルマン・ラウシュニング〕であった。残りの二つの窓は、ヒトラーが自ら再び開けたのである——何とそれは、単なる一種の私的な見通しのためにであった。確かに人々は、この私的な見通しについて知られることになるのであるが、しかし、それはあとになってのことである。つまり、同時代人ではなく、のちの人々が、ヒトラーの輝かしい上昇の秘密とその没落の理由を知ることが許されたのだった。

これら四つの文書に特別な関心を与えているのは、次の事実である。すなわち、たとえこれらの文書が、22年間にわたって非常に異なるこの時代の出来事の進行中に公表されていたとしても、これらの文書は、例外なく思想と行動において絶対的な一致と一貫性を証明しているのである。この首尾一貫した目的意識のある行動という見解は、しばしば疑問視されていた。ヒトラーの存命中に、ドイツや外国の全ての観察者のなかでほとんど一人も、この事実を信じようとはしなかった——ひょっとすると彼らは、西側のある種の政治家たちと同様、非常に驚くべき拡大を見せる新たな権力に直面して、駝鳥政策〔危険や不都合な事実を故意に無視する姑息な政策〕を推進したからなのかもしれないし、あるいは彼らは、ある種のドイツの政治家たちと同様、この権力の拡大を彼ら自身の限定目標に利用することを期待していたからなのかもしれない。首尾一貫した行動というものは、1945年のあとにおいても疑問視されていたが、それも、思考の鋭利さや目的意識のある行動といった肯定的なことは簡単には何も彼に認めたくないほど、ヒトラーの低俗で非人間的な性質に嫌悪感を覚えていた幾人かの歴史家たちによってであった。けれども私は、こうした論拠は誤りであると確信している。歴史的な出来事は、これらの政治家の見解を否定しているのだ。そして私は、歴史家たち——そのなかには、サー・ルイス・ナミエール、アラン・ブロック、A. J. P. テーラーといった私がきわめて尊敬する同郷人がいる——は、道義的な低劣さから低い知能を推論するという誤りを犯している、と主張したいのである。ヒトラーの性格が低俗で残忍であったということ、それを私は自覚している。けれども人は、幼稚と冷酷は、創造力と首尾一貫した行動と決して相容れないとは見なさないはずである。

まず証拠の品の『わが闘争』、すなわち、かつて聖書の次に、たとえその大部分は読まれなかったにしても、最も広く配布されたこの本から始めることにする。『わが闘争』のなかで使われている嫌悪感を催させる粗野な言葉や、そのヒステリーさ、恥じることのないプロパガンダにもっぱら目が行って、私たちは、この本に表れている、確かに洗練されてはいないが、疑いなく存在する〔ヒトラーの〕知能を無視してよいはずはないであろう。この本には、細部に至るまで完全に仕上げられた一つの政治哲学が表れている。この本のなかで、ヒトラー自身は自らを歴史専門家と称しているが、その勉強は、世界は歴史的大転換期の始まりにさしかかっていることを彼に確信させたという。ヒトラーは、世界はどこに行くのだろうかということ以下のようにはっきりと明らかにしている。海上の地位や艦隊、植民地保有で獲得された富を通じて世界を支配する小海軍国の時代は、終焉を迎えている。それとともに、これらの小海軍国によって打ち立てられて世界秩序もまた徐々に解体していく。将来においては、政治権力〔の獲得〕は、もはや遠くにある植民地——これは、意味のないものになっている——の保有ではな

く、今日の技術的な対策によりようやく役立たせることが可能になった広大な国土の支配にかかっている。さらに技術の時代は、そのような領土の開拓に成功する国家に対して、それを基盤に世界帝国を継続して樹立できる可能性を提供するのである。あとは、いずれの国家がこのような力を最初に動員できるのか、という質問が残されているだけである。これについてヒトラーが自問自答すると、彼にとっては、二つの強国だけが考慮の対象になってくる。ドイツとロシアが、それである。1923年において、ドイツもロシアもともに敗戦国であった。両国のうちいずれかが、被った敗北にもかかわらず、この歴史的に一度限りの機会を手にしうるチャンスはあったのだろうか。

あまり自信に満ちていない政治的出来事の傍観者には、ドイツないしはロシアがそのような行動に必要な手段を持っていたのかどうかということが、恐らくとても疑わしく思われたに違いなかったであろう。けれどもヒトラーは、自信を持っていたのである。彼は、ドイツはこの課題に耐えられると信じていたのだった。もちろん、打ち負かされ、士気を喪失し、軍備を縮小されたワイマル共和国のドイツではない。また、君主制のドイツでもない。君主主義国は、あまりにも弱すぎたのであった。君主国は、チャンスを手にはしていた——それから、そのチャンスを棒に振ることになったのだ。歴史が、チャンスの棒を折ってしまったのである。君主主義的な考えは、それ自体としてあまりに保守的すぎたのだった。その代表者たちは、もっぱら再建だけを問題にしていたのだ。すなわち、1914年の国境の再建と1914年の植民地の再獲得だけを問題にしていたのである。これに対してヒトラーは、1914年時点の国境は新時代においては、植民地と同様、時代遅れであると確信していた。そのような望みは、彼の見るところでは、意味がないばかりか、そのうえ軽蔑すべきものなのであった。のちに彼は一度、「君主制は、世界帝国を維持するにはよい。君主制を征服できるのは、しかし、革命のみである」と語ったという。それゆえヒトラーは、1923年に革命を夢見たのだった。具体的には、たとえば宮廷革命などではなく、ロシア革命に匹敵する歴史的な革命、すなわち、世界史的な意義のある新たな権力要素をもたらすことになる革命であった。そのうえ彼が誰にも疑いを抱かせなかったのは、彼自身が、そのような革命の創造者かつ指導者になるだろうということである。自分は、歴史がごく希まれにしかもたらさないあの鬼才の一人である——自分には、歴史的な転換期を正しく判断し、実践的に有効活用することに精通しているあの哲学的・政治的化合要素が備わっているのだ、と彼は口にしていた。1923年にヒトラーは、自分が権力の座に就いたなら、あらゆる傷口からまだ血を吹き出しているドイツのナショナリズムから、ドイツの歴史的使命にふさわしい革命運動を起こし、そして自分は、たとえばヴェルヘルム二世治下のドイツの幻影だった遠方の植民地ではなく、憎むべきソ連の広大な領土を征服しようとするだろう、と述べていた。ヒトラーはこの課題のために自らを、すでに1920年に彼の最初の公の講演がこの現下の問題を取り扱っていたことを指摘しながら、読者に売り込んだのであった。すなわち、この講演において彼は、ブレスト・リトフスク条約（同条約に基づき、ドイツはソ連工業の中心部を併合した）の「深い人間的信条」について語り、そしてこの条約を、ベルサイユ条約（同条約に基づき、ドイツ工業の鋭い爪がそぎ落とされてしまった）の恐ろしい残忍性と比較していたのである。

すでに1923年にヒトラーの念頭に浮かんでいた熟慮の上での具体的な戦争目的に関する信頼すべき叙述としての『わが闘争』の本当の意義が、たびたび見落とされている。やはり、他の多くのことと並んで、きつとただ一つの小さな次のような詳述が、この本の意義を証明していよう。たとえドイツ国民の誰もがこの本を読むことができ、また読むべきであったにしても、ヒトラーは、完全翻訳（少なくとも、英語への翻訳）を許さないために、彼の著作権を利用していたのであった。正式に認可された英語への翻訳は、原文の5分の1の長さにしかならないという不十分な断片以外の何物でもなかった。1939年になって初めて、あるイギリスの出版社が翻訳出版禁止に風穴を開け、逐語訳を発行したのだった。このような経緯から、イギリスの、そしてまた他国の政治家や政治作家も、『わが闘争』の誤解の恐れのない文言に耳を貸すことはなかったのである。ひょっとすると彼らは、ヒトラーは自らこの本のなかで述べたことを本当に思っていないだろうとか、あるいは、ヒトラーは自らの意図を実際に行動に移すことなどできないだろうといった、はかない望みさえ抱いていたのかもしれない。賞賛すべき一つの例外は、その間に亡くなったサー・ロバート・エンソーというイギリスの傑出した歴史家兼記者であった。1933年以来エンソーは、ヒトラーは戦争を望んでいるのだ、という確信を粘り強く口にし

続けていた。そして1935年にエンソーは、ヒトラーは1938年の春にオーストリアを併合し、その年の秋にはヨーロッパ戦争か、あるいは、チェコスロヴァキアのことで戦争せずに済むためにヨーロッパが降伏することを強要してくるだろう、とはっきり宣言していた。エンソーの予測的中したが、この予測は何に基づいていたのかと問われて、彼は、「何はさておき『わが闘争』の読書」であると答えたのであった。それゆえ、このエンソーの発言は、ひどい内容ではあるが、しかし意味のあるこの著作の誇張の多い文面を克服するために精力を傾注するよう私をも鼓舞してくれたので、とくに私の記憶のなかに残っているのである。

ヒトラー自身の著作である『わが闘争』をまともに受け取ろうとしない人々がいたが、これらの人々はまずもって、ラウシュニングの暴露（その真偽のほどは、まだ一度も証明されたことはなかったのではあるが）を重視することはなかったであろう。実際、1939年の刊行（『ヒトラーとの対話』）後、幻想にとらわれていたネヴィル・チェンバレンは、その一語たりとも信じていないことを表明していた。『わが闘争』を読んでいた人なら誰でも、ヒトラーの世界支配計画に関するラウシュニングの暴露にほとんど驚くことはなかったであろう。ラウシュニングの本で最も特徴的なことは、日付——本の内容に関しても、また本の発表に関しても——が並べてつき合わされたならわかるのであるが、不変性の証明なのかもしれない。内容的に1932年から34年にかけての時期を取り扱いながらも、この本は、10年の経過〔1923-33年〕や権力掌握〔1933年〕、これと一体となった責任は、暴力や革命をめぐるヒトラーの目的をまったく変化させていなかったことを証明していた。また1939年という発行年は、ラウシュニングがああ目的の定式化を実際に歪曲することなく再現したことを証明している。1939年の時点において、確かにヒトラーは、ソ連との間で条約〔独ソ不可侵条約〕を結んだが、それは、ポーランドや西側諸国〔英仏〕に対して戦争できるようにするためだったのである。西側諸国においても、またドイツにおいてさえも、この条約は、ヒトラーがビスマルクの政策路線〔対露友好政策〕に入ったことの証明として、多くの人々によって引き合いに出された。仮に、巷間いわれていたように、ラウシュニングがもっぱらこの時点までの出来事に光を当てて彼の本を書いていたなら、恐らく彼は、このときは間違っているように映っていたに違いなかったとはいえ、その後の歴史的出来事によって本当であることが明らかになった、あの一文を挿入することなどまずなかったであろう。だが彼は、これを挿入したのだった。この一文が重要なのは、ヒトラーはどんな形での植民地保有も無用として片付け、ドイツの戦前の国境をはした金として取り扱っているのであるが、しかし、そのあとでソ連を話題にしていることである。ヒトラーは、次のように述べていたのだ。「ひょっとしたら私は、ソ連との同盟を回避することはできないかもしれないだろう。私は、この同盟を最後の切り札として手のなかにしまっているのだ。ひょっとしたら、これは、私の人生における最大のギャンブルになるかもしれない。しかし、このギャンブルといえども、私が西側で自らの目的を達成したあと、決然として既定路線に方向転換し、ロシアを攻撃することを私にやめさせることなど決してできないであろう。…我々だけが大陸広域圏を創出することができるのであり、しかも、モスクワとの条約といったものを通じてではなく、我々の支配を通じてのみ、もっぱら我々の支配のみを通じてである。我々は、このための闘争を引き受けるつもりである。この闘争は、永遠の世界支配のための扉を我々に開くことになるだろう」。

こうしてヒトラーは、1923年から34年までの間、彼の目標が変わることなくはっきりと知らせていたのだった。すなわち、君主国の植民地と旧国境〔の再獲得〕を断念すること（彼は、後者は「我々の革命には値しない課題である」と考えていた）、その代わりに、あらゆる時代にわたってロシアの大陸広域圏を占領し続けられるような革命的国民運動を組織することであった。このきわめて明白な事実確認を前にしても、奇異の念を抱かせるのは、よく知られた歴史家たちが、ヒトラーは断じてそのように定式化された戦争目的を持っていなかった、という主張に固執していることである。F. H. ヒンスリー氏は、彼の著作『ヒトラーの戦略』のなかで、ヒトラーはイギリスの抵抗意志をくじくという目的のためだけに1941年にロシアを攻撃したのだ、と自らの主張の根拠を述べている。また、ヒトラーに対してそもそも首尾一貫した行動の存在などまったく認めたくないA. J. P. テーラー氏は、ヒトラーは必要に応じて即興でやってのける一連の取り替え可能な基本思想——つまり、絶えずその時々にあふさわしい理論——を展開していたのだ、という見解である。では、ヒトラーは『わが闘争』において、ドイ

ツの永遠の敵として根絶されねばならないフランスとの決定的な対決については、口にしていなかったのではないか。そしてそのあと、アメリカとの決戦についてはどうであったのか。そうした論拠をこれらの歴史家たちは用いているので、私もまたこれらの論拠に耳を貸すつもりである。

ヒトラーは様々な動機でほとんど全ての種類の説明をする用意ができており、こうした説明はそれゆえ、彼がそれを行ったからというだけで真に受けてならないのは、いうまでもなく正しい。しかし、彼によって公言された目的のなかのいくつかは、たとえ彼が次の機会には逆のことを主張したとしても、彼の真の意図を含んでいたはずなので、我々は、彼の説明を全てためらうことなく無視することはできないのである。我々は、真実を見極める基準を用いなければならない。そして、そのような基準はしかも、かなりたやすく見つけることが可能である。ヒトラーによって立てられた目的は、この目的が、一時の戦術的必然性から説明することができる場合はもちろんのこと、まず第一に、戦術的要請とは逆であっても定期的に表明されている基本見解の一端であり、第二に、彼の長期的な物質的準備と一致しているようであるならば、真実と見なすことができるのである。もし私たちがこの基準値を設定したなら、ヒトラーの種々の説明間の矛盾はたちまち解消可能となる。その一方で、東方帝国建設の思想だけが依然として残っている。1932年においてヒトラーはフランスに対して激怒していたが、それは本質的には、当時フランスが東欧同盟システムの中心国だったからである。それはちょうど、1937年にゲーリングがアメリカ大使に向かって、「フランスとの緊迫した状況をめぐる唯一の理由は、正当なドイツの主張を満たすことに反対しているフランスの東欧同盟政策である」と述べたのと同じである。また、ヒトラーが1940年においてフランコの使節セラノ・スネールに向かって、本当の敵はイギリスである、と説明したとするなら、この発言の狙いは簡単に見抜くことができる。すなわち、ロシアという戦利品から、フランコは何を手にするができるのか、ということであった。同様に、1941年においてヒトラーが、〔ドイツの対ソ戦はありえないとして〕黙殺したムッソリーニのような人たちがや本当に驚愕したドイツのある提督に対して、突然の対ソ攻撃を魅力あるものに見せなければならなかったときも、これと似ていた。このとき、いうまでもなくヒトラーは、対ソ攻撃は対英戦勝利への最善の道である、という論拠を利用したのだった。しかし事實は、彼の実際的な準備作業と計画性のある政策は、彼にはイギリスにもフランスにも関心がなかった、ということを実証している。ヒトラーは繰り返し、彼の戦争は、たとえば西方に対する旧来の戦争などではなく、ロシアに対する革命的な戦争であると強く訴えていたのである。

自らの真の意図についてヒトラーは、歴史家や外国の観察者たちを欺いていただけでなく、さらに私が便宜上「ドイツの旧支配層」と特徴づけたいもう一つの集団をも欺いていたのだった。私によって名付けられたこの集合名詞は、ドイツの保守的な官僚や将軍、政治家たちを指しているが、彼らは1933年にヒトラーのために権力への道を開き、1933年以降は、彼らが最終的にひどく失望するようになるまで、また幾人かの場合は、最初の従者から殉教者への苦難の道を歩むに至るまで、少なくともしばらくの間は彼に忠実に仕えていた。それは、ノイラートやヴァイツゼッカー、ハッセル、シャハトのような人物とその他のさらに多くの者たちであった。これらの人々は、すでに言及されている通り、同じように戦争目的を持っていたというよりはむしろ、政治目的——平和の道があることを望んでいたのではあるが、ひょっとしたら戦争を通じてのみ達成できるかもしれない政治目標——を持っていたのだ、といった方がよいであろう。彼らは、敗北によって動揺したドイツ人の自覚を再構築するという無理からぬ意図を持っていたのだった。彼らは、軍隊が国家の不可欠の構成要素としての地位を取り戻すよう努めていた。また彼らは、喪失した帝国領土を再獲得することを望んでいた。けれども、彼らの領土権の主張は限定的であった。要するに、彼らはもはや、アルザス・ロレーヌ地方というやっかいなものを要求してはいなかったのである。彼らは、東方の土地——しかし、新たな領域ではなくて、伝統的に帰属していた東方領域——つまり、ヴィルヘルム二世時代の旧ポーランド国境を求めていたのだった。彼らがドイツ皇帝よりもさらに先に進む用意、すなわち、オーストリアに加えてズデーテン地方をも併合する用意があったとするならば、それはもっぱら、ハプスブルク帝国の崩壊によって引き起こされた必然性だったのであり、南東ヨーロッパへの政治的野心の表れなどではなかったのである。というのも、これらの人々の要求は、まったく抑制的であり、かつまったく復古主義的だったからである。仮に彼ら

が共産主義国のソ連を嫌っていたとしても、彼らはソ連を征服するつもりはなかった。財政的コストやこれと一体になっている危機を全体的に見て取ったなら、ソ連に対する征服戦争はドイツ革命をもたらすだろうことを、彼らは——ヒトラーが考えていたように——予測していたのだった。私たちは、このドイツの旧支配層がどのように道を間違え、不可欠の共犯者として犯罪的方法を用いただけでなく、彼らとまったく別の目的を追求していた一人の男に、なぜ仕えることができたのかということを考えてみなければならない。

それに関しては、確かに多くの理由が存在している。私たちは、弱さや自己欺瞞、巧妙な買収といったことを列挙することができる。多くの点で、ドイツの旧支配層は一般的な意味における身分などではなかった。すなわち彼らは、伝統に根ざしあるいは共通の基本原則で一体となった貴族階級ではなく——排他的社会集団であり、内部が腐敗した利益集団なのであった。この弱さに、ヒトラーはつけこんだのである。しかしこれ以外にも、さらにいくつかの地理的な重大要素が顧みられねばならない。ヨーロッパ地図を眺めるとわかるのは、ヒトラーが自らの大政策を遂行するためには、当面は旧支配層によって担われた小政策を追求せざるをえない、ということである。旧支配層が手に入れようとしていたのは、彼らがそれ以外に職業的にも関心を示していた軍隊の創設を通じて、ドイツの名声とナショナリズムを強化することであった。また彼らは、フランスを東欧から追い出すことを目指し、そして最終的には、ドイツの旧東部国境を、ポーランドを犠牲にして再び回復し、ドイツ＝オーストリア人とズデーテン地方のドイツ人を編入して、ハプスブルク家が残した隙間を埋めることを目的にしていたのだった。彼らは、これ以上やるつもりはなかった。このように限定された目的に対して、もちろんヒトラーは軽蔑以外の言葉を持ち合わせておらず、彼は、自分はロシアを征服するつもりであり、ウラルまで、ひょっとするとさらにそれをも超えて、そしてあらゆる時代にわたって占領し続けるのだ、とさえ述べていた。しかし、もしポーランドを通過しないなら、どのようにしてソ連に侵攻できたであろうか、あるいは、フランスを事前に締め出しておかなければ、どのようにしてポーランドを片付けることができたであろうか。純粋に地理的な理由からヒトラーは、彼の革命的な政策の第一局面として、旧支配層の保守的な政策を追求せざるをえなかったのである。それは、彼にはきわめて好都合であった。というのも、ヒトラーは彼らの支持を、自らの本来の目的を表に漏らした場合に比して、より多く確保できたからではないだろうか。しかしヒトラーは、旧支配層の政策上の諸計画を実現するやいなや、仮面を取り去ることができたのである。今や準備が整い、勝利を手にし、何ものにも邪魔されずに、彼自身の政策に取り掛かることができたのである。要するに、旧支配層の意図を満たすことは、もっぱらヒトラーの意図を満たすための不可欠な前提にすぎなかったのである。

それゆえ、ヨーロッパが最も深刻な危機を経験していた1940年と41年に、ドイツにおいても道が分かれたのであった。ウルリヒ・フォン・ハッセル——彼は、ドイツの旧支配層の典型的な代表者であり、その殉教者でもあった——の日記のなかに、この点に関して示唆に富むコメントがある。1939年以前にハッセルは、駐イタリア大使としてヒトラーの目的を後押ししていた。ヒトラー的な政策への彼の支持は、関連文書の公表によって知られたあと、西側世界の多くの人々を狼狽させた。事前に知られてはいたが、その後出版された彼の複数の日記に基づいて、西側の人々は彼を狂人の一人と見なしていた。1940年の春において、それでもハッセルとその同調者たちは、彼らの望みは全てかなえられたと思っていた。今や彼らは平和を切望するようになっていたのであるが、もっともそれは、その犯罪的な天才が彼らにつけ込み、彼ら自身が武器を委ねていた一人の冷酷人間〔ヒトラー〕が、凶暴に走り回って殺人を犯すまでのことであった。ハッセルとその同調者たちは、彼らの平和目的、すなわち「歴史に由来する確かな実態を伴った国籍主義」の実現——もちろん、それによって考えられていたのは、ドイツに好都合な展開過程からもたらされた実態であったが——を明確に述べていた。ハッセルの具体的な条件によると、「オーストリアやズデーテン地方のドイツとの統合〔すでに1938年に併合されていた〕は、議論の外にある」とされ、続けて彼は「同様に、ドイツの西方における国境問題の再検討も、ドイツ・ポーランド境界線が根本的には1914年時点のドイツ帝国の国境と一致しなければならなかったのとは異なり、考慮の対象にはならない」と述べていた。この「修正」——彼らがこれを手に入れられたのは、ヒトラーのおかげであったが——によって、ハッセルとその同調者たちは、「独立国家とし



てのポーランドとチェコ共和国の再興」に同意するつもりであった。加えて、保守的な復古主義の作品を完成させるためには、「君主主義がきわめて望ましい」とされていたのである。

ハッセルとその同調者たちの考え方は、いかなる食い違いも見せていない。——どこで彼らに出会っても、たとえ戦時であってもあるいは平時であっても、役所においてもあるいは抵抗運動においても、まったく同じであった。彼らは、ヒトラーの戦争目的と同じように変わることなく、一つの社会層全体の努力や弁明、弁解を代表していた。彼らとは、30年代には外務省の公文書のなかで出会い、40年代には保守派の抵抗運動のなかで出会い、そして最後には、自己正当化のために書かれた戦後の回想録のなかで会うのである。しかし、彼らが口にしてしている内容は、少なくとも1940年以降に関しては、いうまでもなく純粋にアカデミックな研究の対象になっている。これらの人々は、40年以前においては、ヒトラーに仕えていた。そしてその後、彼らは、ヒトラーに対して何ら厳しい文句をつけることはなかった。一旦ヒトラーに権力が委ねられ、彼がこの権力を利用して地位の安泰を図ったあとは、もはや彼を失脚させることは不可能になっていた。それでもやはり、これらの人々は外国の観察者たちと同様の言い訳をすることは許されない。彼らは『わが闘争』を読んでいたし、もしそうでなかったとしても、この本を少なくとも読むことができ、また読まなければいけなかったのである。

1941年に結局ヒトラーは、彼の変わることのない戦争目的の実現に着手した。彼に冷淡な西側諸国〔英仏〕とその無力で空虚な抵抗のことなどあまり重視することなく、彼は、電撃的に行われた一撃で世界史を創るために、東方に進軍した。戦後しばしば、ヒトラーの対ソ攻撃は彼の最大の「誤り」であったということを耳にした。もしヒトラーがソ連に対して中立を守ってさえいれば、彼はヨーロッパ全体を自分に従わせ、これを組織し、不動のものにすることができたであろう、といわれた。そしてイギリスは、彼をヨーロッパから排除することは断じてできなかったであろう、ともいわれた。こうした見方に、私は与しない。要するにこの見方は、ヒトラーはヒトラーではなかった、ということ前提にしているのである。ヒトラーにとって対ソ攻撃は、たとえば華やかな軍事上の寄り道、あるいは重要な資源鉅脈を追い求める部分探検、すでに引き分けの可能性の高いチェスの対局におけるとっさの衝撃的な指し手ではなかった。つまり、国家社会主義の成否は、対ソ攻撃しただけだったのである。対ソ攻撃は、無条件に絶対必要であったのみならず、もはや一刻の猶予もなかったのである。今こそチャンス到来とばかり、ローマとアッティラ率いるフン族との間で行われた「カタラウヌムの戦い」にヒトラーがたとえていた、この真に画期的な戦争が、開始されねばならなかったのである。この戦争が非常に差し迫って必要になってきたので、ヒトラーは、西方での勝利を待ち続ける気にすらならなかった。これについてヒトラーは、次のように述べていた。あとで対ソ戦の番になる。最初にソ連が片付けられたなら、頑固なイギリス人たちさえあきらめるだろう。今や私は、東方において攻撃を加えねばならず、しかも、ただちにである。

ヒトラーはそもそも、なぜあんなに急いでいたのだろうか。それは、時間は彼の味方ではない、と彼が信じていたからだ。待つことは、多くの不利な結果をもたらすのだ。すなわち、彼によって創設された巨大な国防軍を維持するための超過出費や、国防軍の兵器の老朽化の危険とすでにそうなっているナチス指導層の老齢化の危険、低下しているドイツの出生数、「爆弾を手にしたどこかの人間」が、世界帝国の建設という巨大な課題を克服する能力を持つ唯一の人物を殺害するかもしれないという不安、であった。その一方では、ソ連の人口は絶え間なく増大し、ソ連の工業は急速に発展し、10年後ないしは15年後にはソ連は「世界で最強の国家」になっているだろう、というのである。それゆえヒトラーは、すでに1937年にこう明らかにしていた。「次のことだけは、確かである。私たちはもうこれ以上は待てない……総統がまだ生きているのなら、彼は、ドイツの空間問題を1943年から45年よりも遅くに解決しないために、最終的な決断を下すだろう……この時期を過ぎてしまうと、我々にはせいぜい状況の悪化くらいしか予測できないのだ」。仮にヒトラーが、もっぱら「徐々に死滅しつつある」西側への戦争だけを行うことを望んでいたのであれば、急ぐ理由など全くなかったのである。時間が、いやそれどころか歴史の動きが彼に不利に進んでいるのは、東方戦争の方なのであった。即座の攻撃と鉄の意志によってのみ、ヒトラーは、歴史の流れを逆転させることが期待できたのであった。そして彼はこの歴史の流れを——最後の瞬間に——、アジア的な野蛮集団を「中心国」から追い出すというやり

方で、逆転させようとするのである。

「中心国を支配するものは誰であっても、世界を支配する」。この考えを代表するのは、地政学の創設者であるイギリス人のサー・ハルフォード・マッキンダーであるが、彼からヒトラーは——ハウスホーファーとヘスを通じて——自らの考えを導き出していた。この「中心国」は、東欧とソ連のヨーロッパ部分で構成されていた。ヒトラーは自分とスターリンを、革命的なエネルギーによって突き動かされながら、この中心国の支配をめぐる争う二人の巨人とみていた。そしてヒトラーは、勝利者は、それが誰であろうとも、この領域を再び手放すことだけは決してありえないということにかけては、良心のとかげなど感じるはずもないことを知っていたのである。ドイツの旧指導層の政治家たちは、そのような野心的な目的を何ら持っていなかった。なぜなら、他の理由と並んで、彼らはそうするにはあまりにも優しすぎたからであった。1934年に記されたヒトラー宛てのある覚書のなかでシャハトは、東方植民政策は、東欧の人口はすでに十分であるゆえ、そもそも実施不可能であると指摘していた。この指摘は、ヒトラーの目には「お笑いぐさの感傷的人道主義」と映っていた。こうしたことは、ドイツの旧支配層が彼の、すなわちヒトラーの戦争目的を知らなかった、ということだけを示していた。これらの紳士たちは、優越的地位を手に入れるための通常の戦争指導という概念のなかで考えていたのだった。ヒトラーは、西方でのそのような通常の戦争を指導し、そしてそれゆえ、そこでは従来通りの戦争法規を尊重したいと考えていた。けれども、東方における戦争に関しては、それは全く別のことであった。すなわちそれは、途方もなく大きな土地の所有と、その住民を追い出すのかあるいは完全な奴隷状態に置くのかの権利をめぐる戦いなのであった。そのさい、どんなルールも遵守されることはありえず、しかも容赦は与えられてはならないし、また期待されてもいけなかった。モスクワは地上から消えてなくならねばならず、モスクワという言葉は、歴史書や地図、それどころか人々の記憶からも消されねばならなかったのである。

ヒトラーが1941年に彼の最後の一撃をまさに加えようと身構え、全ての前線で圧倒的な勝利を収めていたとき、彼は自らの晴れの日がやってきたと思った。ついに、20年間にわたって一途に暖められ続けてきた夢がかなえられることになるのであった。それゆえ彼は、自らの最後の政治思想を明言し、自らの心の奥底にある本性への新たな窓を開くときが、再びやってきたと考えたのである。彼の秘書であり信頼のおける指導者でもあったマーティン・ボルマンは、しかるべき準備を行った。ヒトラーは、東プロイセンあるいはウクライナの彼の司令部にいて演説をし、そして従順な速記者たちがついたの後ろに隠れながら、この「救世主出現の聖なる福音」を書き留めた。要するに、ヒトラーの「テーブルトーク」あるいはもっと正確にいうと独白が、彼によって獲得された権力について、彼によって今や樹立されることになる世界帝国について行われたのである。

ヒトラーの「テーブルトーク」は、身の毛のよだつようなぞっとする文書であるが、嫌悪感を覚えさせると同時に人を引きつけたりもする。それは、人間性なき精神の鏡であるが、それでも体系的で時にはしかも明確な意志力を有している仮借なき精神の鏡である。かつてヒトラーは、「私は、全ての問題を最小分母に約分する〔共通項を見いだして最簡略化する〕才能を有している」と述べていた。そして彼は、この機会にそうしたのである。時に、彼の単純化のやり方は恐るべきものになる。実際ヒトラーは、ブルクハルトが称した「恐るべき単純化」の一人なのであった。そこでヒトラーは、少なくともある一つのことに関しては謎をかけていない。つまり、東方で今や樹立されるべき彼の「新秩序」の見取り図ほど、明白なものはないのである。それは、いかなる人間性も、いかなる文化も、いかなる意味づけも欠いているまさに不気味な野蛮帝国である。それは、相当悲惨な、そしてたぶん倒錯した科学の知識によってかなり続くことになるだろう「新たな暗黒時代」——かつてサー・ウィンストン・チャーチルが、ナチス運動によって開始された新時代をそう呼んだように——であった。なぜならヒトラーは、世界帝国というものは、もっぱら国家の名声のために自己を保存しなければならない使命を有しているのである、と明言していたからである。「所有している者が、所有者である」、これは、ヒトラーにとって政治モラルの総和である。支配民族は、何かを再び手放す、あるいは、その臣民が権利を主張できるように彼らを迎える、といった大きな愚行を決して演じることはできない。それゆえ、大ドイツ帝国に従属する諸民族は、武器を所有することを禁止され、またどんな種類の教育も受けることを許されな

った（命令を聞くに足るドイツ語の知識は別であった）。彼らは避妊をしなければならず、また病院に行くことを禁じられていたので、その人口数は、出生率の低下ならびに高死亡率によって抑制されていた。このようにして人口が減少したならば、奴隷化したロシア人たちは、劣等な被抑圧者階級として存在し続けることを許され、そして、高速道路によって結ばれた難攻不落の要塞に居住してドイツ人であることを賛美しオペラ「メリーウィドー」の旋律に耳を傾ける、ドイツ人植民者の特権貴族たちのために、木を切ったり、水を汲んだりしなければならなかったのである。ヒトラーは、「国家社会主義が一定期間存続したあとには、そもそもこれとは別の生活様式はもはや想像もできなくなってしまうだろう」としていた。

このような姿をヒトラーの「千年王国」は描いていた。1941年に彼は、その基礎を築いたと思っていた。1945年2月には、それへのあらゆる希望が潰え去り——見たところ永遠に——、そしてヒトラーでさえこれを認めざるをえなかった。これは、ヒトラーがそうすることをずっと長く拒否していた悲痛な告白であった。しかし、今やそれは不可避になっていたものであり、あとに残されたのは、この悲劇的な運命の転機はどのようにしてもたらされえたのか、という質問だけであった。一体、どのようにしてなのか。ヒトラーがこの質問に取り掛かったとき、彼は、このことに関しては後世のために明らかにしておかなければならない、と再び感じていたのであった。もう一度、一つの窓が開かれて、もう一度、彼の思考の闇のなかに光が入り込むことになった。かつてのラストエンブルク〔戦時における軍事司令部〕やヴィーンヌイツァ〔ウクライナの総統司令部〕でのように、今やベルリンにおいて全ての機構が新たに動きだし、ついたてが設置され、その後ろには速記者が配置された——ヒトラーは、第四の窓を開けて彼の「聖書」の最終章を明らかにするために、立ち現れたのであった。彼の失敗の原因、これについて彼の説明はどのようなものであったのだろうか。他の非常に多くの人たちが語っていたこと、すなわち、ソ連に対する彼の戦争は誤りであったとか、彼は——ドイツの旧支配層にとって当時切実な問題だったのであるが——1940年に立ち止まるべきであったとか、そういったことをヒトラーは本当に口にしたのだろうか。断じて、そんなことはない。彼が白状して認めたのは恐らく、1940年ないしは41年にイギリスとの間で都合のよい講和を結ぶことが可能であったということであろう。すなわちそれは、両当事国が退廃したロマン人の敵に対して勝利を収めていたので——フランスに対してドイツ、イタリアに対してイギリス——、両国にとって都合のよい講和であった。けれどもやはりヒトラーは、すぐさま引き続いて、次のように付け加えていた。こういった講和は長続きするものではなく、ドイツの戦争潜在力の戦術的な方向転換のためだけに決定されていたことであろう。「そのさいにはドイツは、背後の安全を保障されて、わが人生の聖なる使命、国家社会主義の存在目的、すなわちボルシェヴィズムの根絶のために、全身全霊を込めて真の戦いに突入することができたであろう」「東の方へ、もっぱら東の方へ我々の生命線は広がらねばならない」。

ではヒトラーはそのとき、恐ろしい自らの敗北の原因をどこに見ていたのだろうか。この最後の会話のなかで、ヒトラーは多くの可能性を論じている。彼はそもそも戦争を開始すべきであったのだろうか。それは、すぐさま再び口にされる質問である。これに関しては、最初からやはりナチス運動は、戦争というただ一つの目標を持っていたということである。彼はひょっとすると、戦争をあまりにも早くやってしまったのであろうか。これに関しては、否であり、これもまた彼は認めるつもりはなかった。ソ連は、攻撃されねばならなかったのであり、相当多くの理由が、そうすることを促していたのであった。おまけにヒトラーは、このとき次のように主張していた。それどころかもっと早く戦争を開始する方がよかったし、またどうしても避けられない西方に対する予備戦を1939年ではなく、早くも38年に始める方がよかったのだ。しかし、当時ドイツは、残念ながら、物質的に強かっただけで、それに対して道徳的には弱く、しかも反動的な将軍や外交官たちをしょい込んでいたのだった、と。この点に関して彼はまた、ミュンヘンでヒトラーの全ての要求に応じ、彼から戦争遂行の理由を取り上げてしまった英首相チェンバレンの「いまいましい」振る舞いにも言及していた。「全ての点で、この臆病者たちは譲歩したのだ！彼らは、我々の全ての要求を受け入れた！そんな状況下では、いうまでもなくイニシアティブをとって戦争を始めることなど、ほぼ不可能であった」。

それ以外には、何が間違いだったのだろうか。行きつ戻りつしながら、ようやくヒトラーは誤りに気

がついた。彼は、ムッソリーニを信用していたこと〔の誤り〕を、打ち明けたのである。そのことが、彼の不幸であったという。もちろん彼は、ムッソリーニをとて賞賛し、彼がお手本になったことや、とりわけオーストリアが併合された1938年における彼の友情に対して、非常に感謝していたという。けれども1941年にムッソリーニは、悲劇の同盟者であることが明らかになったというのである。その不運な地中海での冒険的な軍事作戦、とりわけ独伊両国間で事前の話し合いもなく都合の悪いときに敢行されたイタリアのギリシャへの軍事攻撃を通じて、ヒトラーはムッソリーニによって、独軍のバルカンへの軍事介入とそれに伴う対ソ戦の5週間の延期を余儀なくされてしまったのだ。1941年5月15日に予定されていた対ソ戦は、バルカンでの独軍の軍事行動の負担が原因で、6月22日ようやく開始することができたのである。

対ソ戦延期の結末は、何だったのか。ヒトラーにとってそこには——もちろん、過去を振り返って初めてわかるのであるが——もはや疑う余地は何もなかった。彼の対ソ攻撃は、電撃戦として計画されていた。5月に、それは実行に移されるはずであった。ところが、この対ソ攻撃は遅すぎた——5週間遅すぎた——ので、その後やってきたのは冬、すなわち予想に反してとても早く始まった恐ろしいロシアの冬であった。ドイツ軍は雪で立ち往生し、計画は台無しにされたが、他方でロシア人は回復することができ、イギリス人は新たな同盟者をつくり出して、その背後に新たな戦線を開くことができたのだ。ヒトラーは当時を振り返り、1941年に立てられた彼の全ての目的の達成に彼がどれほど近づいていたか、また彼の勝利は、まだ彼がこれを祝っている最中にどのようにして消え去ってしまったのか、について考えた。怒りがこみ上げてきて、彼はもう泣き出さんばかりであった。「この愚かなギリシャ攻撃」と彼は叫び、こう続けた。「枢軸国のイタリアによってではなく、ドイツによって予定通りに戦争が遂行されていたなら、我々は、1941年5月15日にソ連を攻撃できていただろう。二倍の軍事力をもって、わが陸軍は決定的かつ最終的な勝利以外の何ものをも承知していないので、我々は冬の到来以前に作戦行動を終わらせることができただであらう。全ては、そのようにはいかなってしまったのだ！」。

終焉間近のこのときでさえヒトラーは、いまだに彼従来の戦争目的を公言していた。1920年から45年に至るまで、彼にとっては、ナチス運動は常にただ一つの使命を有していたのである。世界帝国を打ち立てること、ロシア人から彼らの国の「大陸広域圏」をもぎ取ることが、それであった。敗北のあとでさえヒトラーは、このことを隠し立てしなかった。この最後の政治意志の表明から1ヵ月後、ヒトラーはシュペーアに向かって、ドイツは彼を見殺しにしたので滅亡するにふさわしいとして、「将来は、もっぱらより強い東方民族に隷属する」と語っていた。そして、死の前日にヒトラーはベルリンの地下防空壕から、国防軍に向けて一通の伝令を発した。それは、彼の最後の伝令であった。この最後の懇願するような伝令の終わりの文章は、「ドイツ民族にとって、東方で空間を獲得することが使命であり、またそうあり続ける」というものであった。

このように不変ということに関しては、ヒトラーの戦略的な最終目的は、戦術的な策略ないしは一時的な譲歩といった変わりやすい裏事情の類いとは、疑う余地なくはっきりと一線を画していた。様々な時期に、彼は様々な窮地に陥っていたので、それに応じて様々な譲歩をしなければならなかったのである。ヒトラーと彼の戦争目的の間には、1923年にフランスが、1940年にはイギリスが立ちはだかっていた。けれども、英仏両国は決して真の敵ではなかった。フランスは、一旦占領され無害にされようと、穏便に取り扱われ、いやそれどころか甘やかされていたのである。イギリス軍がノルマンディー海岸に上陸したとき、イギリス軍は、そこでの良好な物資の補給状況にひどく驚いたほどであった。ヒトラーは、イギリスに「保障」を与える用意が常にあった。1924年に彼はそのうえ、独英協調の必要性について、一冊の本を書いていたのだ。この本は、もはや存在していない。けれどもルドルフ・ヘス——それはそうと、彼は、ヒトラーがその東方支配の「地政学的」な思考を獲得するに至った供給源であった——は、この本を知っていた。ヘスはそのうえ、この本が1941年の彼のイギリスへの劇的な単独飛行の動機になっていたほど、これをよく知っていたのである。こういった状況は、ドイツの内部でも似たようなものであり、そこでは旧支配層が、彼らの限定された目的を有しながら、ヒトラーとその政策の狭間に立っていた。ヒトラーの戦術は、こうした抵抗に気を配っていた。『わが闘争』がどの本

箱のなかにも目にすることができた30年代全体を通じて、ヒトラーの教義は、すくなくとも世論や外国においては氣勢がそがれていた。こうした状況にヒトラーは、基本的には全く満足していたので、この彼の戦術は、もっぱら典型的な若気の至りと見なされていた。1939年にヒトラーはそのうえ、「彼の人生のなかで最大のギャンブル」を思い切ってやってみたのだった。独ソ不可侵条約の締結が、それであった。しかし、これら全てのことは、戦術的な必要性だったのである。側近グループの間ではヒトラーは、彼の著書『わが闘争』の教義を口にするのを決して止めはしなかった。そして、1941年にフランスやイギリス、またドイツの旧支配層がとどめを刺されたとき、ヒトラーは仮面を脱いだ。ヒトラーの偽りのない本当の声が再び聞けるようになり、彼は突然、敵と味方の区別なく容赦なしに、「自身の人生の夢、すなわち国家社会主義の存在目的」である東方領域の征服を実現するために、姿を現したのである。

(平成24年11月9日受理)